

# 「上野猿の子踊り」伝承活動の取組

1 学校名 指宿市立開聞小学校

2 学年・人数

6年生3人 5年生2人 4年生3人 3年生2人 2年生1人 1年生2人  
幼児2人 (計15人)

3 日時・場所

(1) 練習の場所・日時

ア 開聞郷土芸能祭のための練習

上野地区営農研修館 8月21日(日)(10:00～12:00)

イ 上野敬老会のための練習

上野地区営農研修館 8月28日(日)(10:00～12:00)

(2) 発表の場所

ア 開聞郷土芸能祭

開聞総合体育館 9月4日(日)(10:00～12:00)

イ 上野敬老会

上野地区営農研修館 9月19日(月)(13:00～15:00)

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能、伝統行事や史跡について

(1) 名称

上野猿の子踊り(うへのさるのこおどり)

(2) 由来

上野地区が薩摩藩島津家の一族である今和泉島津家の領地であった頃、上野の東側に鍋島岳の山中に「塩手どん」という社(やしろ)が祀られ、多くの猿が仕えていた。猿たちの日課は、一里ばかり離れた川尻の海岸に行列を組み塩汲みに行くことであった。塩汲みの途中で、村人が「ダゴ」を木に吊るしていると、「ダゴ」の匂いに誘われて、猿が右往左往して仕方がない。村人たちは困ってしまった。侍が通りかかったので、村人たちは、侍に猿たちを追っ払ってくれるようお願いした。侍は、村人に「ダゴ」を分けてもらい、猿たちに指図をしているいろいろな芸をさせ、褒美に「ダゴ」を振舞ってやったところ満腹の猿は、列をなして帰っていった。

猿の子踊りは、この様子を踊りにしたもので、1744年に今和泉島津家が興された頃から踊られているといわれている。

(3) 構成等

ア 踊り手

上野地区に居住する小学校1年生から6年生の男子と4歳から6歳の幼児の合計15名。サスケ(猿使いの侍)2名、親猿、小猿、二才(にせ)猿で、幼児から小学校6年生までの男の子だけである。

イ お囃子(はやし)

子ども会育成会の役員と有志指導者3名である。

唄はなく、鉦(かね)と太鼓と笛、拍子木のお囃子である。

ウ 衣装

サスケ(猿使いの侍)は袴(かみしも)姿である。猿は、顔に厚化粧を施し、

赤いつなぎの衣装に赤い帽子のいでたちであり、サスケの指図に従って様々な芸をする。

## 5 保存会や地域との連携の具体

- (1) 上野地区の文化部長が保存会長となり、文化部員が補佐している。
- (2) 踊り手が子どもたちであるため、子ども会育成会役員が子どもたちの面倒を見ることとお囃子の鉦と太鼓の役割を担っている。笛は地域の有志指導者が演奏している。
- (3) 練習にかかる費用は、地区の文化部の予算でまかなっている。
- (4) 練習は、地域の有志指導者に依頼し、文化部長及び子ども会育成会役員が補佐している。なお、文化部長と文化部員は、上野区の青壮年部（18歳～65歳の男子）の中から選挙によって選んでおり、任期は2年である。

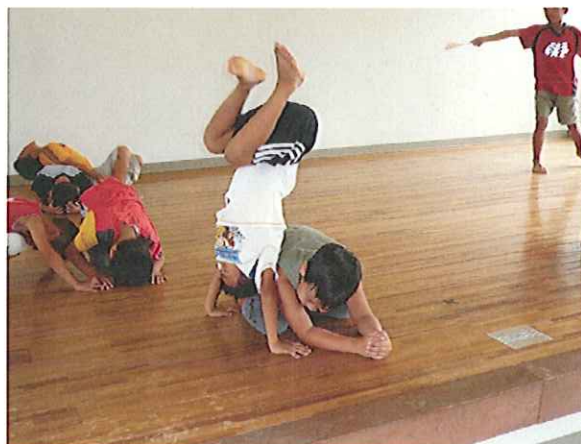
## 6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

上野地区では、郷土芸能である「上野猿の子踊り」と「上野棒踊り」を、文化部の活動項目の中に組み込んでいる。「上野猿の子踊り」の継承は子ども会に依頼し、「上野棒踊り」は青壮年部が継承している。伝承活動を文化部の年間計画に入れているので、これからも毎年引き継いでいくと思われる。

## 7 取組の様子（練習状況、発表の場等）



【 練習風景 1 】



【 練習風景 2 】



【 上野地区敬老会での発表 】



【 上野地区敬老会での発表 】

## 8 参加児童生徒・保護者・保存会・教職員等の感想

### (1) 地域の感想から

- ア 子どもたちは練習の後に、お菓子等を貰え、また、地域のほとんどの子どもたちが集まり、みんなで遊ぶことができるので、練習を楽しみにしているようである。
- イ 顔に厚化粧をするのが、ちょっと嫌だという子もいる。
- ウ 保護者は、子どものころ踊ったことがあるので、男の子どもは皆踊るものだと思っている。地域の保護者もこの踊りが文化財として価値があることを理解しており、今後も継承されていくと思われる。

### (2) 学校の感想から

各地域では、素晴らしい伝統芸能を継承し、芸能大会等においてその披露をしている。子どもたちは、それぞれの学年に応じて目標を持って練習し、発表の機会を楽しみにしながら活動している。学校職員が、直接伝統芸能に携わる機会は少ないが、地域の指導者や育成会の皆様の積極的な取組に大変感謝している。学校でも、学習発表会や運動会等で、子どもたちが継承する場を確保していきたいと考えている。

子どもたちは、日ごろ経験しない子どもたちどうしの「縦のつながり」を大切にしながら、継承活動に取り組んでいる。「お兄ちゃんお姉ちゃんから、手の動きを教えてもらってうれしかった」など、継承活動に取り組んでいる様子を日記に書いている。

担任によると、そのような日記を読むたびに、子どもたちが披露する芸能を是非見に行きたい、応援したいと考えているようである。

このように、地域・保存会・子ども会・学校が一体となって、これからも郷土芸能の伝承活動がますます充実して、子どもたちや保護者・地域等で披露する機会や場がより多く提供されるよう、学校としても関係団体と連携を図っていきたい。